

## 《毛利3兄弟のふるさとツアー 見所解説》

2022. 3. 19 ガイド/秋本哲治(安芸高田市教育委員会)

1. 清神社
2. 興禅寺跡(郡山公園)
3. 常栄寺跡、毛利隆元墓所
4. 毛利元就墓所、洞春寺跡
5. 三矢の訓跡碑

### 郡山城デジタルガイドマップ(2021年製作)

- ・郡山城の航空レーザ測量データを基に、木のない状態の郡山城の地形を再現したタブレット。
- ・GPSで現在地を表示し、各史跡のガイド機能(文字と音声)を搭載。
- ・城内8ヶ所で、当時の地形を再現したVRが閲覧可能
- ・城内14ヶ所で元就らの書状がもらえる、書状ラリー機能も搭載。
- ・歴史民俗博物館にて、1台500円で貸出中。

### ◆郡山城

標高:390m、比高190m、約1km四方 ※中国地方で戦国期最大級の山城

史跡名称:毛利氏城跡 郡山城跡(国史跡、昭和15年指定)

16世紀後半に中国地方を制圧した戦国大名毛利氏の本拠城。元就～隆元～輝元らの居城。

### 【郡山城と安芸毛利氏の歴史】

建武3(1336)年 毛利時親、吉田庄へ入部→安芸毛利氏はじまる(この時点での居所は不明)

享徳2(1453)年 毛利当主から家臣への文書に「城誘(こしらえ)」→これが郡山城本城か?

大永3(1523)年 毛利元就家督相続し、猿掛城から郡山城へ入城

天文9(1540)年 郡山合戦(尼子軍による吉田侵攻)

天文15(1546)年頃 元就から隆元へ家督が相続される。

→これ以後、全山城郭化が進み、元就が山頂部「かさ」へ、隆元が「本城」を居所とする

弘治元(1555)年 厳島合戦により毛利氏が安芸備後を完全に掌握→事実上安芸国内での戦争が終結

永禄6(1563)年 毛利隆元急死。長男輝元が家督相続

永禄9(1566)年 出雲富田城開城→毛利氏による中国制圧

元亀2(1571)年 毛利元就死去→織田氏との対立始まる

天正10(1582)年 毛利氏、織田軍(羽柴軍)と和睦→3年後、豊臣家臣へ

天正19(1591)年 輝元、郡山城から広島城へ本拠地移転→この後も使用された

慶長5(1600)年 関ヶ原合戦により、毛利氏が安芸を去る→郡山城廃城

寛永14(1637)年 島原の乱の後に破城が進む

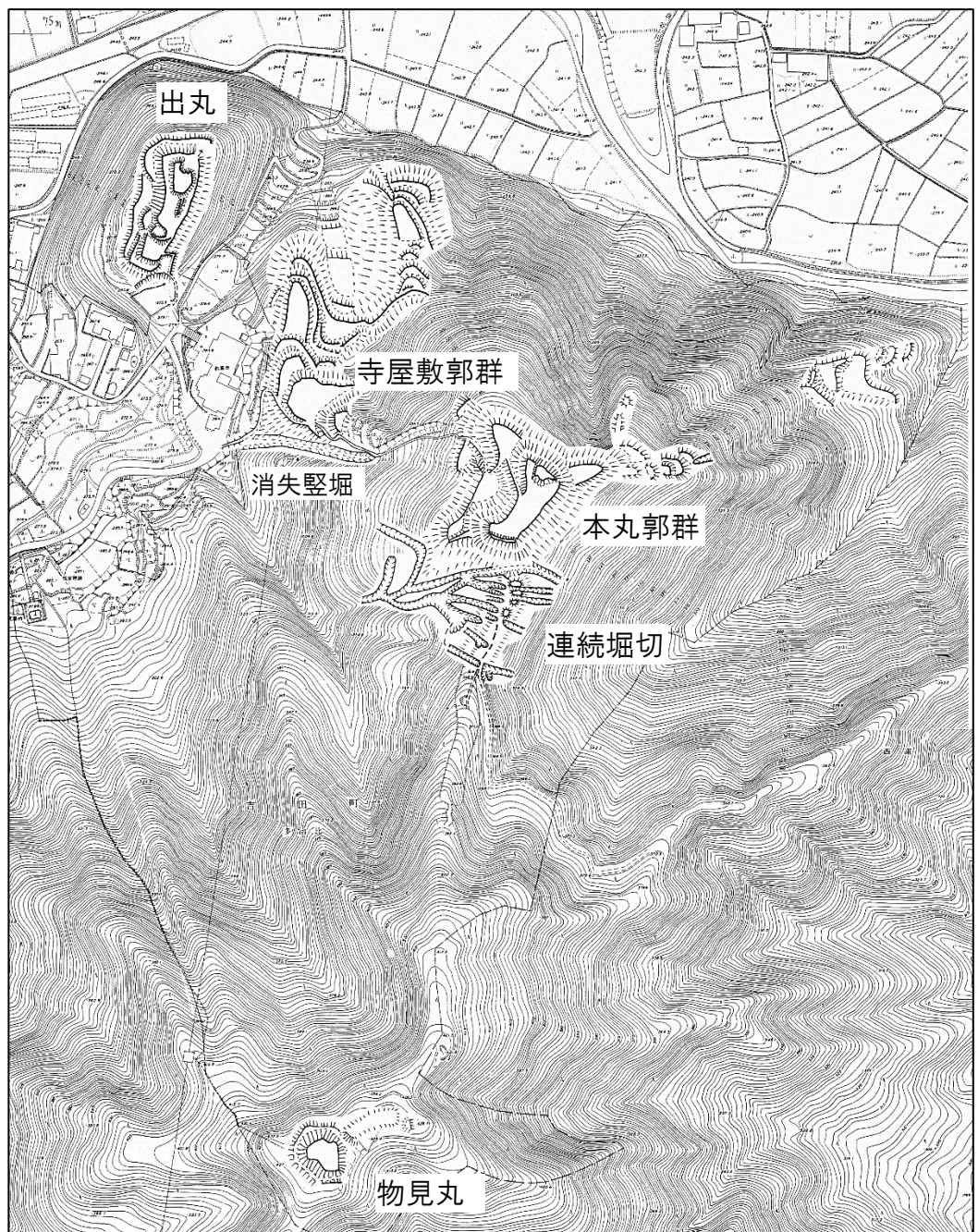
文久3(1863)年 広島藩、郡山城跡山麓に支藩の陣屋建設→郡山城要塞化計画

## 6. 毛利弘元墓所

## 7. 多治比猿掛城

標高 432m、比高 180m (物見丸)

多治比における毛利氏の拠点であったのが猿掛城(近世以降の呼称)で、国史跡に指定されている。全体は中腹の本丸を中心とし、寺屋敷郭群、出丸、さらに山頂部の物見丸で構成される。本丸の南背後には、写真の大堀切をはじめ、多数の堀切や堅堀が残り、軍事性の高さがうかがえる。また、城の西麓には、弘元の菩提寺悦叟院跡があり、弘元とその正室の墓所(正室の墓は大正十年に福原より移転)がある。弘元の隠居時、彼は33歳、幸千代丸は8歳で、当時の毛利氏は、周防大内氏方か管領細川氏方かの選択を迫られていた。その圧力から逃れるため、弘元が形式的な家督譲与と移転をしたと考えられ、実質的には引き続き弘元が当主であった。一方で、猿掛城の軍事性の高さは、北の高橋氏などへの毛利領西側の備えであったとみられる。弘元としては、将来的に元就が西の猿掛城で興元を支えていくように、幼い松寿丸を伴ったとも推測できる。



猿掛城図  
(作図：秋本哲治)

## 8. 毛利隆元逝去の地

かつてここに真言宗蓮華寺があり、隆元の宿所であったと言われる。永禄6年8月4日未明に、ここで急死し、茶毘に付されたと伝わる。江戸時代はここが墓所ともいわれていた。蓮華寺は江戸時代初めに浄土真宗に改宗し、名前も蓮照寺に改め現在地に移転したと伝わる。

## 9. 五龍城

甲立盆地の西南端、可愛川と本村川の合流地点の丘陵尾根筋に築かれており、盆地全体を見渡せる。二つの川を天然の堀とし、細長い急峻な尾根を利用した要害の地。城の西側に吉田と甲立を結んだ旧道(妻坂峠越)が通り、さらに三次(備後)、原田～横田、そして三和方面に通じる要所という立地の良さが顕著。

1334年、常陸国の宍戸朝家が甲立荘に入り当初柳ヶ城を拠点としたが、のちに対岸の元木山に五龍城を築き本拠としたと伝わる。しかし、これらは江戸期の伝承で、実際は不明。15世紀末に大内方の宍戸氏の城として史料に登場し、落城している。その後、16世紀に新たに宍戸氏居城として増改築されたと考えられる。以後、毛利氏の防長移封(1600年)まで存続した。

この山は築城時に水がでなかつたため、城内の五ヶ所に龍王を祀ったところ、突然水が湧き出しこれが五龍城の名前の由来となったという。また、歴代の城主がこの水を愛し、隆家が「千貫にもかえ難し」といったことが、現在は山麓から湧き出る「千貫水」の語源になったと言われている。

